

## 繁華街の若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究分担者：松高 由佳（広島文教女子大学人間科学部 准教授）  
研究協力者：大串 晃弘（宝塚大学看護学部 助教）  
高橋 篤信（宝塚大学看護学部 専任講師）  
合田 友美（宝塚大学看護学部 准教授）  
研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部 教授）

### 研究要旨

本研究では繁華街の性的に活発な若者男女を対象に、HIV/STI に関する知識・意識・性行動・検査行動に関する実態調査を行った。大阪市内のクラブ店舗に入場した 20 歳以上の男女を対象に、スマートフォン・タブレット端末でアクセスするオンラインの無記名自記式質問票を実施した。調査実施期間は 2017 年 12 月～2018 年 1 月で計 12 回、20 時～深夜 2 時まで実施した。847 件の回答があり、有効回答数は 819 件であった（有効回答率 96.7%）。男性 514 名（62.8%）、女性 305 名（37.2%）、年齢は平均 24.2 歳（SD=3.7）で 90.7%が 20 代であった（range； 20～45）。男性の 91.2%、女性の 89.5%が恋愛対象として異性のみを選択した。得られた主な知見は以下のとおりである。

- 1) HIV/STI に関する知識、検査の知識項目では、女性の 81.3%が「HIV 検査では膣の診察がある」と誤解、全体の 50.7%が「エイズにかかるとすぐに死ぬ」と誤解、72.3%が「迅速検査」の存在自体知らなかった。
- 2) 過去 6 か月間にセックス（膣性交、アナルセックス、オーラルセックス、相互マスターベーション）経験ありの割合は 87.7%（男性 86.2%、女性 90.2%）で、そのうちの大半が複数のセックスパートナーを有していた（全体 72.4%、男性 76.8%、女性 65.5%）。
- 3) 過去 6 か月間のコンドーム（ゴム）使用状況において、挿入時のゴム常時使用率は 51.5%、（男性 54.9%、女性 46.0%）であり、セックス人数が増えるほどゴム常用率は低下していた。
- 4) 生涯の HIV 検査受検率は 11.6%（男性 13.6%、女性 8.2%）であった。受検経験ありの回答者に受検場所を尋ねたところ（複数回答）、保健所は 51.6%、（男性 54.3%、女性 44.0%）、病院・診療所等 35.8%（男性 30.0%、女性 52.0%）、郵送検査 5.3%（男性 5.7%、女性 4.0%）であった。

以上より、クラブ利用の若者の大半が HIV/STI の正しい知識や関心を有していないことが明らかとなり、セックスの人数が多い者のコンドームを常用率が特に低いなど、HIV/STI 感染リスクの現状が明らかとなった。HIV/STI や検査に関する基本的な知識を底上げし、男女それぞれにマッチする予防行動実践のためのコンテンツを盛り込んだ予防介入を開発、実施、評価していくことが課題である。

### A. 研究目的

わが国では近年、国民一般における性感染症（STI）の増加が注目されている。厚生労働省の性感染症報告数の発表では、梅毒の感染が 20 代の男女に増加していることが示され、特に 20

代女性において平成 24 年度から平成 28 年度にかけて約 10 倍の増加を示した（報告数平成 24 年度 65、平成 28 年度 718）。しかし、感染経路の実態は把握できておらず、説明が急がれる。また、こうした STI 罹患は HIV 感染の可能性

を高めることから注意が必要であるが、HIV/AIDS への社会的関心の低下が懸念されている。

そこで本研究では、HIV/STI の受検推奨および効果的予防啓発資材開発につながる基礎的資料を得るため、本研究では繁華街の若者男女を主たる対象に、HIV/STI に関する知識・意識・性的リスク行動・検査行動の実態を明らかにすることを目的とした。

## B. 研究方法

### 1. 調査対象者および手続き

大阪市内のナイトクラブ 2 店舗に入店した 20 歳以上の男女を対象に行動疫学調査を実施した (2017 年 12 月～2018 年 1 月に 12 回、20 時～深夜 2 時まで実施)。調査員がクラブの入口付近で入場客をリクルート、各自のスマートフォンで QR コードを読み込み、無記名自記式質問票サイトにアクセスし、約 3～5 分で回答する手順とした。スマートフォンで接続出来ない場合は研究班のタブレット端末での回答とした。外国人客および泥酔していると思われる客については本調査票への回答は困難と考えられるためリクルートの対象から除外した。

回答終了者には謝品としてクラブのドリンクチケット (700 円相当) 1 枚を手渡した。

### 2. 質問票の構成

回答回数、年齢、性別、恋愛対象となる性別、クラブ利用目的、現在の悩みやストレス、HIV/STI や検査の知識、HIV 検査受検行動 (生涯)、過去 6 か月間のセックス人数・相手の性別・種別、過去 6 か月間のセックス時コンドーム使用状況、コンドーム使用目的、コンドーム不利用の理由、STI 既往歴 (生涯)、薬物使用経験 (生涯)、出会いを求める場 (出会い系アプリ含む) などから構成した。質問項目は、先行研究および 20 代の男性 2 名、女性 8 名を対象としたヒアリングをもとに作成した。

## 3. 倫理的配慮

質問票サイトは Secure Socket Layer(SSR) によって保護され、回答者が回答データを暗号化してサーバーに送信することで情報漏洩を防止した。リクルートの際にはポスター、口頭での説明に加え、質問票サイト上の説明にて研究目的や質問項目、データの取り扱い、プライバシー保護等について十分に説明し、同意を得た場合にのみ回答画面に進む手続きを取った。回答途中でも回答を取りやめることができる旨を表示し、さらに調査終了画面には苦情・問い合わせ先を明示した。本研究の実施にあたり、広島文教女子大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

## C. 研究結果

### 1. 回答者

847 件の回答があり、2 回目以上の回答、回答傾向から不正回答が予見されるケース、性別で「その他」を選択したケースを分析から除外した。その結果、有効回答数は 819 件であった (有効回答率 96.7%)。男性 514 名 (62.8%)、女性 305 名 (37.2%)、平均年齢 24.2 歳 (SD=3.7) で 90.7%が 20 代、男性の 91.2%、女性の 89.5%が恋愛対象として異性のみを選択した。

性的リスク行動の背景には種々のストレスが関わっていることから、回答者の背景として悩みやストレスに感じることを複数回答で尋ねたところ、最も高率だったのは「仕事や学業に関すること」で 51.8%、次いで「恋愛関係のこと」が 18.9%、「お金のこと」が 17.3%であった。その他、回答者の属性に関する結果については表 1 に示した。出会いを求める場については、「クラブ」が最も高く 37.5%、次いで「合コン」30.3%であり、「出会い系アプリや SNS」は 8.9%と低率であった (表 2)。

### 2. HIV/STI に関する知識、検査の知識 (男性 4 項目、女性 5 項目、図 1)

最も誤解率の高かった項目は女性のみが対象

の項目「HIV（エイズ）の検査には、内診（婦人科や産婦人科での膣の診察）がある」で女性の81.3%が誤解していた。また、「HIV（エイズ）にかかると、すぐ死ぬんじゃないかと思う」は全体の50.7%が誤解、「その日のうちに結果がわかるHIV（エイズ）検査がある」は72.3%が誤解していた。このほか「STIに感染するとHIVに感染しやすくなる」は68.4%、「STIに感染しても症状が出ないことがある」は61.8%が誤解していた。HIV/STIに関する知識、検査の知識は全体的に低いことが明らかになった。

### 3. HIV 検査受検行動（表 3）

生涯の HIV 検査受検率は 11.6%（男性 13.6%、女性 8.2%）であった。受検経験ありの回答者に受検場所を尋ねたところ、保健所は 51.6%（男性 54.3%、女性 44.0%）、病院・診療所等 35.8%（男性 30.0%、女性 52.0%）、郵送検査 5.3%（男性 5.7%、女性 4.0%）であった。

### 4. 性行動

過去 6 か月間にセックス（膣性交、アナルセックス、オーラルセックス、相互マスターベーション）経験ありの割合は 87.7%（男性 86.2%、女性 90.2%）であった（「答えたくない」と回答した人を除く）。過去 6 か月間にセックスがあったと回答した人のうち複数のセックスパートナーがいた割合は 72.4%（男性 76.8%、女性 65.5%）で比較的高率であった。過去 6 か月間のセックス人数と相手性別の詳細は表 4 に示した。

過去 6 か月間のセックスの相手種別（複数回答）では、「恋人など特定の相手」が 52.4%（男性 47.3%、女性 60.6%）、次いで「友達・セフレと」が 45.6%（男性 49.3%、女性 39.8%）、「街やクラブでナンパされた相手と」13.6%（男性 13.0%、女性 14.5%）の順に割合が高かった。金銭授受関係については「お金を払った相手と」6.3%（男性 9.8%、女性 0.8%）、「お金をくれた相手と」2.3%（男性 1.3%、女性 4.0%）であっ

た（表 4）。

過去 6 か月間のコンドーム（ゴム）使用状況において、挿入時のゴム常時使用率は 51.5%（男性 54.9%、女性 46.0%）であり、女性では人数が増えるほど段階的にゴム常用率は低下し、男性は「10 人以上」になるとゴム常用率が低下する傾向にあった（図 2）。

これまでに性経験ありと回答した者にコンドーム使用目的に関する意識を尋ねたところ、男女とも半数以上が「避妊のため」を挙げ、性感染症予防について意識しているものはそれに比して低率であった（表 5）。

### 5. コンドーム不使用の理由

過去 6 か月間のセックスで挿入時コンドームを使用しなかった経験のある者にその理由を尋ねたところ（複数回答）、男性は「気持ちいいから」が 55.7%と最も高かった。この結果は他の項目（いずれも 20%以下）に比して突出していたことから、男性では快感を求めることがコンドーム不使用の主たる理由であった。一方、女性は「気持ちいいから」（27.3%）よりも「コンドームが手元になかったから」が最も高く（32.0%）「つけようと言えなかった」が 16.4%で第 3 位に上ることから、予防行動への主体的意識や実践の乏しいことが性的リスク行動に繋がっている可能性が示唆された。その他結果の詳細については表 6 に示した。

### 6. 既往歴（生涯・複数回答）

最も割合が高かったのはクラミジア 12.2%（男性 9.9%、女性 16.1%）、次いで梅毒 8.4%（男性 11.3%、女性 3.4%）、淋菌感染症 6.6%（男性 7.6%、女性 5.0%）であった（表 7）。

### 7. アルコール関連・薬物使用経験（生涯・複数回答）

最も経験率の高かったアルコールでの酔いつぶれは、女性の方が高率であった（全体 17.3%、男性 14.8%、女性 21.5%）。次いで睡眠薬・睡

眠導入剤 3.1%（男性 3.4%、女性 2.6%）、覚せい剤 1.0%（男性 1.6%、女性 0%）と続いた。これらの結果は国内のクラブユーザを対象とした先行研究<sup>1)</sup>と比較すると概して低い割合であった。違法、脱法ドラッグのいずれかを生涯に経験した割合は 4.4%（男性 6.0%、女性 1.7%）であった（表 8）。

#### D. 考察

本研究では、わが国でほとんど報告のないナイトクラブ利用の若者男女における性行動の実態、HIV/STI や検査に関する知識の実態に迫ることに成功し、様々な知見を得た。

#### 性行動について

回答者の多くが過去 6 か月間に複数のセックスパートナーを有しており、「4 人以上」と回答した割合は男女とも約 3 割に上った。セックス人数が増えるほどコンドーム常用率が低下しており、HIV/STI 感染リスクが高い状況といえよう。相手の種別としては恋人など特定の相手や友人など、身近で日常的な関係におけるセックスが主であり、ナンパや金銭授受を介した相手とのセックスも一定数確認された。一方、インターネット上の関係を介したセックスは少ないことが示唆された。

コンドーム不使用の理由からは、男性と女性で異なる傾向が示唆された。男性は主に快感を求めるがゆえにコンドームを使用しない傾向が強いが、女性は予防行動への主体的意識や実践の乏しいことが性的リスク行動に繋がっている可能性がある。これらの知見を今後の予防啓発的介入に活かしていくことが期待される。

#### 検査勧奨に関する要因について

生涯 HIV 検査受検率について、国内の先行研究<sup>2)</sup>では 10.5%との報告がある（男性のみ）。本研究の結果はそれに比するとほぼ同等の数値と位置づけられるが、決して高い数値とはいえず受検率を向上させることが望ましい。しかしなが

ら、本調査の結果からは HIV/STI や検査に関する正しい知識を有していない若者が大半を占めていることが明らかとなった。近年指摘されている HIV/AIDS への社会的関心の低下を、如実に反映した結果と考えられる。特に、「HIV の検査に内診が必要である」、あるいは「エイズにかかるとすぐ死ぬ」といった誤解は、偏見や恐怖につながり受検行動を阻害すると考えられるため、彼らが HIV/STI や検査についての基本的な知識を得て、受検行動への肯定的な意識を持てるような介入が急務である。

#### E. 結論

本研究の知見は、調査対象となった若者の性的リスクを明らかにし、今後必要な HIV/STI の予防啓発介入の方向性を示した。HIV/STI や検査に関する基本的な知識を底上げし、男女それぞれにマッチする予防行動実践のためのコンテンツを盛り込んだ予防介入の開発、実施、評価を行う必要がある。さらに、同地点および他の地方でのモニタリングを継続していくことも必要である。

#### F. 発表論文等

##### 1. 論文発表

（和文）

- 1) 大塚泰正・松高由佳・飯田順子・遠藤寛子・島田恭子・津野香奈美・藤桂・堀口康太：米国心理学会における LGBT 対応ガイドラインと産業保健スタッフへの提言、産業精神保健、26、121-126、2018.
- 2) 松高由佳：セクシュアリティ・ジェンダーと世代継承性。世代継承性研究の展望（岡本祐子・上手由香・高野泰代編著）、ナカニシヤ出版、第 8 章、2018（印刷中）。

#### G. 引用

- 1) 嶋根卓也・和田清・日高庸晴。クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究、平成 25 年度厚生労働科

学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラ  
トリーサイエンス総合研究 違法ドラッグの  
構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱  
用実態把握に関する研究 平成 25 年度研究報  
告書（研究代表者 船田正彦）、 58-72、  
2014.

- 2) 金子典代・塩野徳史・コーナ ジェーン・新  
ヶ江章友・市川誠一. 日本人成人男性におけ  
る生涯でのH I V検査受検経験と関連要因、  
日本エイズ学会誌、14、 99-105、 2012.